



原 大

HARA Takashi

双日
代表取締役副会長

先人に学ぶ志と覚悟 ～「ものづくり」からの関西復権～

双日は、ともに総合商社であったニチメンと日商岩井が経営統合して発足し、本年4月で10周年を迎えました。タイミングよく、5月には読賣テレビ放送の開局55周年記念ドラマ『お家さん』(玉岡かおる原作)が放映されました。これは日商岩井の源流の一つである鈴木商店の話です。このようなことを契機に、先人たちの足跡を振りかえってみると、関西の復権や東京一極集中の是正を考える上でも大いに学ぶことがあるのでは、と考えさせられました。

時は、1853年。米国から黒船が来航し、翌年、日本は260年続いた鎖国をついに解くことになりました。貿易港に指定された神戸は開港からほどなくして、海外の先進的な技術や商品が行き交う輸入港として栄えました。当時の関西の人びとはそこで、産業革命によりもたらされた西洋の近代化の威力を目撃する機会とともに、立ち遅れた日本の現実を突き付けられ、大きな危機感を抱いたことでしょう。他のアジア諸国が列強により植民地化されゆくなか、自ら産業を興して国家を支えるのだと決意した先人たちの志と覚悟、これにわれわれが今一度思いを寄せることが必要ではないかと思えてなりません。

ニチメンの前身の日本綿花、そして日商岩井の前身、岩井文助商店(後の岩井商店)と鈴木商店は、いずれも開国からほどなくして大阪・神戸で創立されました。3社の先人達は外国商人との居留地貿易での屈辱的な経験を経て、産業を興すことで日本の地位を向上させ、日本を一流の先進国とすることを第一の使命と思うようになります。

あらゆる産業が立ち遅れていた状況で、そのすべてを手掛けようとしたのが、岩井商店の初代社長、岩井勝次郎と鈴木商店の大番頭、金子直吉。今もゆかりの企業の多くが各界のリーディングカンパニーとして活躍する製造業群を



立ち上げた背景には、単に彼らの事業欲が旺盛だったというより、日本の近代化に貢献し、また、市井の人々の生活を発展させるのだという志や覚悟があったからにはほかなりません。鈴木商店は金子の「生産こそ人間の最も尊い経済活動」との信念のもと、軽工業から重化学工業、化学繊維工業に至るまで、80以上の事業会社を生み出したのです。ちなみに鈴木商店は、1917年には当時の日本のGDPの1割に相当する売上を記録し、日本一の総合商社に成長しました。

こうしてわが社の源流をたどってみてあらためて思うのは、関西は生産、「ものづくり」によってわが国の発展に大きく寄与してきたのだということであり、今日においても生産力の源泉となる強みを、優位性をもって有しているということです。長年培われた技術力や知見、レベルの高い教育・研究基盤の集積、外的なものを受け入れる柔軟性。加えて伸びゆくアジアとの距離的な近さを考えると、旺盛なマーケットに対する強力な生産輸出基地として再びわが国の発展を牽引して復権する素地は十分にあります。具体的には関西の高度な生産基地を核としたアジア諸国との生産分業体制の構築、ということになろうかと思います。

自らの強みに対しての誇りと自負を抱きつつ、かつてここに新しい産業を生み出した先人たち同様、志と覚悟をもって、次の「ものづくり」産業を生み出し、その生産核基地となる。それにより関西、ひいては日本の存在を世界が再び強く意識するようになり、その結果、門前市を成すように自然と人が集まるようになれば、東京一極集中という課題もまた、おのずから解決へと導かれるこことでしょう。

わが社といたしましても、先人たちによる貢献を誇りに、総合商社としての機能を精一杯發揮し、今後の関西の発展に尽力させていただきたいと思います。志と覚悟をもって。(談)